氏名（本籍）	村上（むらかみ）　明花里（あかり）（熊本県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 161 号
学位授与年月日	2025 年 3 月 24 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	近代化にみる日本画と演劇の関わり及び絵画に構築される演劇性
論文審査委員	主　査　教授　前田　力
	委　員　准教授　荒木　享子
	委　員　教授　今村　雅弘
	委　員　准教授　石谷　治寛

論文内容の要旨

演劇と絵画は、それぞれ芸術分野として文化的な歴史の中で現代まで表現の範疇を広げている。この二つの分野は視覚芸術という点で共通しているが、その表現手法は対照的なものである。演劇は、身体を通して演じるという行為によって表現される。また、観る者と演じる者が同じ空間のなかで時間を共有するという特徴をもっており、それはその場限りの一過性のものである。一方、絵画の作品は半永続的なものとして残り続ける。描くという行為に時間要素は含まれるが、描かれた空間には物理的な時間は流れていない。空間的特徴においても、演劇は劇場という三次元空間で行われるものであり、絵画は平面の二次元空間によってつくられるという大きな違いがある。しかし演劇の舞台美術の制作に画家が携わる事例や、芝居絵や役者絵といった演劇を題材に物語性を取り入れた作品が存在しているように、異なる表現形式でありながら文化的な関わりを持ってきたといえるだろう。

日本の明治期は、西洋の文化が持ち込まれ、文明や社会改革が芸術の領域にも多大な影響を与えた転換の時代である。この時代における日本の演劇と絵画のそれぞれの通史的な作品考証については、すでに多くの研究がなされているが、演劇と画家との接点や、舞台美術への取り組みを通した相互の関係性については、あまり目を向けてこられなかった。本論文は、近代を中心に筆者の研究分野である日本画と、演劇の横断的な結びつきを先行研究をもとに提示した上で、最終的にはシノグラフィの観点から、絵画に構築される演劇性について考察を行うものである。

本論文は四章で構成される。第一章では、演劇における舞台美術の空間性と、絵画における演劇性の意味に焦点を当てる。まず、舞台美術を表すシノグラフィの新たな定義を考察した上で、作品と観者の間に築かれる関係性が演劇的なものであることを示していく。さらに、マイケル・フリードが提唱する演劇性の概念をふまえ、筆者が考える絵画の演劇性を展開させる。その方法として、土佐赤岡絵金祭りにおける屏風の展示形態を例に上げ、演劇的な空間創出の可能性について論じていく。第二章では、西洋のシェイクスピア絵画から記録性と虚構性、象徴主義の画家、グスタフ・クリムトとエドヴァルド・ムンクのフリーズ画から時間表現と物語表現について考察を行い、絵画化される演劇空間として作品を位置づけていく。第三章からは、近代日本に視点を置く。演劇の西洋化に伴う劇場空間の変化を概観していくとともに、近代化

の流れのなかで日本の洋画家が舞台制作に携わっていた背景をみていき、絵画がもたらす舞台空間への影響について論じていく。さらに、同時期の日本絵画の近代化の動向を確認し、歴史文脈における日本画の位置づけを明確にしておく。近代以降の日本画は、画壇の結びつきによって発展していったが、役者や作家などの演劇関係者と関わり、実際に演劇界で活躍していた日本画家たちは、伝統的な系譜に位置しながらもそうした団体からは距離を置いている。これまで日本画と演劇の領域にあまり目が向けてこられなかったのも、画壇の歴史としては重要視されてこなかったからである。この近代化の流れをふまえ、第四章では、河鍋暁斎の芝居行灯絵と小村雪岱の舞台装置画、甲斐荘楠音の屏風作品を取り上げ、明治期から昭和初期にかけての演劇との関わり方及び、第一章、第二章で提示した絵画の演劇性を基底とした、それぞれの作品の日本画としての特性と空間性について言及していく。文学の情景描写、美人画の大衆性、装飾性もその範疇にある。具象表現中に心象世界や精神世界を投影させる近代の表現傾向を、屏風といった古典様式に介入させることで構築される空間にも日本画としての演劇性をみることができると考える。

論文審査の結果の要旨

申請者は、近代化にみる日本画と演劇性の関わり及び絵画に構築される演劇性についてシノグラフィー（舞台美術）を軸に論述する。作者は舞台に立つ役者であると同時に絵画を描く作家であり、観客と演者を繋ぐ舞台装置を演劇的な視点から絵画表現の考察を行っている。演劇性の絵画表現とは何かを模索し、2 次元の静止画の中に物語の虚構世界と動的な空間装飾を描き、鑑賞者側の視点を移動させることで新たな表現の可能性を試みたものである。クリムトの「ベートーベン・フリーズ」や舞台美術に携わった日本画家、小村雪岱について考察し、視点を移動させる場面や屈曲から生じる 3 次元への介入を「疑似空間ながら臨場感を持ち、鑑賞者を誘い込む構造」としてシノグラフィを重ねている。作品においても「虚構のスミカ」「誘いの帷(たれまく)」「景」では演劇空間をモチーフとし、舞台の静寂や始まりの予兆、「間」や「余白」が表現され、演劇の緊張感や空気感が伝わる作品となった。また、最終的に提出された「note」は 2 曲屏風作品（内 1 点）となっており、屈曲の効果を使い 3 次元へ視点移動する表現を試みている。加えて墨流しの技法を使い、音量や振動を感じさせる演劇空間を絵画的に表現した。論文の帰結に結び付く視点の誘導、空間性、テクスチャーによる表現がされた作品となっており、論文、作品ともに十分な研究成果とし高く評価する。